

ホイットマンのイメヂャリィ (一)

清水 春 雄

序

ホイットマンには多くの散文もあるが、その思想は悉く凝つて *Leaves of Grass* 「草の葉」に集つていると見る事が出来るので、小論に於ては専らこの代表作「草の葉」の究明に当る。同詩集は周知の通り彼の詩作の殆んど全部を盛つたもので、1855年彼が36才の時第一版を刊行してから1892年73才で歿するまで歳と共に成長し、改訂増補九版¹を重ね、収むる詩篇は約400に及んでいる。

その詩題や内容の変遷は驚くばかりであつて、David McKay が Perhaps no author was given more to change than Walt Whitman.² と語る通りである。幾度もの改訂を経たことは「草の葉」全体としてはそれだけ優れたものになつたわけではあろうが、個々の詩のイメヂャリィを捉えようとする者にとつては尠からぬ不便がある。この詩集はホイットマンの全人的な表現であるから、個々の詩の幾行或は幾節かが互に融通され合つたとしても、彼の全的存在の表現としては何らの異状もないと自ら見ているようである。併し内容に於ける改廢は個々の詩篇のイメヂャリィ追求を困難にするばかりでなく、往々にしてそれを徒勞に帰せしめることがある。リンカン追悼賦の如くイメヂの機能的効果を挙げた纏りのよい作品は、ホイットマンとしては異例のもので、大半は彼の自認する通り、時の流れと同じく始めもなく終りもない。或は思想の断片をのぞかせたものと言える。従つて本稿に於ては個々の詩篇に囚はれず、全詩に亘つて彼

1. 第9版が作者自ら監修した最終決定版である。これに遺稿 *Old Age Echoes* を加えたものが第10版として1897年に出された。

2. David McKay: Preface to the *Leaves of Grass with Autobiography*, 1900.

3. *Song of Myself*, § 3.

の思想解明に役立つ主要なイメヂを捉えようと努めた。

ホイットマンは魂の詩人である。彼は民主主義詩人として知られて居り、それに誤りはないのであるが、その以前に魂の詩人であると言うことが出来る。彼は魂に関係のないことは何一つ歌わぬという⁴。そして自分の宗派を創めるとい⁵う。併しそれは既製宗教に類する宗教の意味ではない。各人の魂の目覚めを促しているから衆生済度とも言えるが、安心立命で終るというのではない。魂の目覚めは平等人の意識の芽生えであり、そしてそのような目覚めた魂の接触が僚友愛を深め、それを母胎として強力な民主主義社会が実現せらるべきであると説く。

Loafer を以て任じている彼の説く所は、一宗一派の教義や学説に囚われず、奔放な自然児として思付くままに吐き出された魂の叫びである。勿論想を練り鍛えたことは当然であるが、それは室内で古典や辞書を参照しつつ思い巡らした考えとしては表わされていない。整然たる理路を辿ることは出来ない。

例えば彼の哲学的思想については John Addington Symonds, Matthiessen, Miss Parsons 等の好意的批評はあるにしても、猶その非論理性は蔽うことが出来ない。Gay Wilson Allen はこれら批評家の説を挙げた後に、We would be wasting our time to search in Whitman's writing for a systematic or professional philosophical theory; but he obviously adapted, applied, and perhaps even developed philosophical ideas in his poetry and prose, whether systematically or not.⁶ と述べている。

ホイットマンは言う、「私と私の仲間とは、議論や比喻や押韻詩などで説得するものではない、/ 私達は私達自身の存在で説得するのだ。」⁷と simile や rhyme にも頼らず、また旧来の権威に頼る要なしとして make no quotations and no reference to any other writers⁸ を標榜している。事実、古今の聖

4. *Starting from Paumanok*, § 12.

5. *Ibid.*, § 7.

6. Gay Wilson Allen: *Walt Whitman Handbook*, pp. 240-241.

7. *Song of the Open Road*, § 10.

8. *Backward Reference*.

賢、大詩人等も引例提供者としては彼の作中に顔を出さない。ここから見ても型にはまつた poetic image に拠らなかつたことは容易に察することができるであろう。善も悪も一切をこめて現在を肯定する彼には、殊更に美を美として讚賞する考えはない。彼の眼には現実の万象は、あるがままに完全であり、凡ては美しい⁹。そのために彼が目に触れ或は心に感ずる凡てのものを讚めたたえる。

読者は彼の万有靈魂の教説に耳傾けているうちに、死生を超えて万物無尽の縁起を覚え、自らの周辺の一切を身近かに感ずる。大衆は国民としての自覚と共に万邦協和の大道を悟る。

ホイットマンの粗剛な逞しい詩は、軟弱な韻律に頼らず古典的な poetic image にもよらない。併し詩は言葉を用いて表わした絵であると言われる限り、彼の説くところも単なる idea の羅列では詩をなさない。詩である限りイメヂが盛られていなければならない。ホイットマンの場合は極めて現在的な迫力を伴うイメヂが多い。

イメヂなる語は狭く比喩的な心象を意味する場合も多いが、本稿では広く描写的の意味にも用いる。尤も C. Day Lewis に依れば poetic image は a picture made out of words であつて、イメヂを生むものは隠喩、直喩、形容語句はもとより、純粹に記述的な言葉であつても、想像力に訴える為に正確な事実の描写以上の何ものかを生ずる、従つてすべての詩的イメヂは或る程度比喩的であるという¹⁰。兎に角詩に於けるイメヂを通して作者の性格を窺わんとし或は作品の解明に役立てんとするならば、狭義のイメヂだけを問題にすることは当を得ないと考える。描写的イメヂの頻度も比喩のそれに劣らず、或はより以上に作者のそのものに対する関心の度を表わしていると考えられるからである。筆者はホイットマンのイメヂャリィ研究の第一歩として曩に行つた彼の海のイメヂの研究に於ても¹¹、この双方のイメヂを考慮し、描写的のものは特に「自

9. *Song of the Open Road*, § 5.

10. C. Day Lewis: *The Poetic Image*, p. 18.

11. 拙稿「ホイットマンの海のイメヂ」, 小樽商大「人文研究」第6輯, 1953.

然の海」として整理したのである。

本稿に於てもこの方針を踏襲するのであるが、彼の所謂 *catalogue style* に浮ぶ万象の描写的イメヂの個々を追うことは極めて困難である。(この困難を容易ならしめるためによき手掛として彼の *concordance* が作られつつあり、完成に近い¹²) ホイットマンにとつては個々に意味ありとしても、その個々が何でなければならぬということはない。個はいづれも等価値であつて等しく宇宙の形成に役立つているのである。 *kaleidoscopic* に現れるものは多くの場合宇宙の種々相、或は彼の平等観の説明に役立つているのであつて個々のイメヂよりは、種々相や平等観の *idea* が擱まればよいのである。イメヂャリィの研究として肝心なことは各詩の中心をなすイメヂや、或は機能的な働きを演ずるものを捉えることであろうが、ホイットマンの場合はそれが結局「草の葉」全篇にゆき亘る *key images* を捉えることとなるのである。

独自の宗教と民主主義の理想を説きすすめる上に、彼のとりあげている主要なテーマは、自己、個人、大衆、靈魂、肉体、死、生、男、女、性、成長、善、悪、時間、空間、自由、平等、愛、アメリカ、新詩などであるが、これらのテーマに直接連がるイメヂを主要なものとする。そのうち比喩的にも頼度の大きなものは次の通りである。括弧内はその表わす主なる *idea* である。

海 (死・生)、船 (靈魂・新詩)、夜 (死・母)、母 (アメリカ)、草 (自己・大衆・愛・新詩)

本稿ではテーマ別に見た分類に従い先づ「自己」をとりあげ、その自己が如何なるイメヂに頼つて表現されているかを例証しようと思う。

(使用テキストは *Leaves of Grass by Walt Whitman, Centenary edition* である。)

(一) 自己のイメヂ

ホイットマンには「自己の歌」という長詩がある。それは最初第一版の冒頭

12. Edwin Harold Eby: *A Concordance of Walt Whitman's Leaves of Grass and Selected Prose Writings.*

に無題で書かれたものであるが、後に種々の ¹title を経て、現在の *Song of Myself* に落付いたのである。これは「草の葉」全篇に亘つての序詩であつて、後続の各詩はその解説敷衍とも見られる程重要な意義をもっている。自己の所信を享け容れさせる為には、先づ己れが如何なる人間であるかを理解させる必要がある。従つて謂わば彼の自己紹介の弁が多い。彼自身のイメヂが豊富に現れている訳であるが、本稿はこの「自己の歌」のみを対象としているのではなく、「草の葉」全篇の詩にわたつて自己のイメヂを辿ろうとするのである。

彼自身についてのイメヂは当然のことながら年齢の進みに従つた変化がある。人生の盛りにある時に見る自己の姿と、凋落の秋に見る自己の姿とは当然に隔りがあるであろう。殊に彼の場合、詩人としての大使命を覚つた後、数年にして南北戦争に直面している。弟の戦傷を機縁に南下して戦場の悲惨な光景を目撃した彼は、惻隱の情禁じ難く看護人を志願して、長期に亘り傷病兵の世話に献身した。その過度の奉仕が不幸にして彼の頑健な肉体をむしばみ中風の気味があらわれ、54才の時は一時重態に陥つた。その後生涯筆は棄てなかつたが宿痾に悩まされたのである。

終始渝らぬ靈魂不滅觀に安住していたとはいえ、この生涯の転変が彼の自己を見る目に変化を与え、そこから必然的に若き日の信条に何らかの改訂が加えられているであろうとは、想定される問題である。靈魂不滅觀なる上屋は終生変らなかつたとしても、それを支える幾多の支柱が徐々に新陳代謝していたかも知れない。その神觀、死生觀、靈肉一体觀などに内容上の移り変りがあるかもしれない。若しこれらがあるとすれば自己を見る眼の変化がその因となり果となつていとも考えられる。

彼が自己と呼ぶものは、彼なる特定の個人を指す場合と一般の代表として見る場合とがある。個人として見る場合も、單純に彼自身を指す場合、彼の肉体を指す場合、彼の魂を指す場合などがある。彼の魂を指す場合は、彼個人の魂がその分身である普遍の靈或は *absolute being* を指す場合がある。そしてこ

1. 1855無題;1856 *A Poem of "Walt Whitman" an American*;1860 *Walt Whitman*;1881 *Song of Myself*.

の謂わば個我と超個人我との間に屢々飛躍があり交錯がある。このような種々の自己の観念は deliberate confusion of the mask and the self² であると評する人もある程であつて、兎に角彼の詩の解釈を困難ならしめているのである。

いま彼の自己のイメヂを大体年代を追つて辿つてその変遷の跡を見ようと思う。前述の通り「草の葉」が彼自身と共に成長したことを思えば、彼自身のイメヂの動きを捉えることは、彼のイメヂァリィ研究の第一歩であり、彼の思想を解釈する上の重要な手掛りであると考えられる。説明の便宜上第一期（南北戦争以前、1855—1860）、第二期（南北戦争より重病期まで、1861—1872）、第三期（重病以降歿年に至る、1873—1892）の三期に分ける。期分けの年代は現実の事実によつてはいるが、イメヂァリィはもとより文芸の世界の問題である。Allen の次の言葉は記憶すべきである。

From 1855 to 1892, Walt Whitman himself did everything in his power to foster the literary illusion that the poet and the book were identical.³

But *Leaves of Grass*, however autobiographical it may be, is also a work of art, which is to say the product of creative imagination.⁴

第 一 期

(1) 野人・櫛の木 「草の葉」決定版に依れば彼自身の描写の始まりは *Starting from Paumanok* にある。魚の形をしたポウマノク島で、完全な母親から生まれ健やかに育てられて、多くの土地を歩き廻つたと歌い出しているが、この詩は1860年の発表である。第一版の巻頭詩であつた *Song of Myself* では、その第一 section、第二 stanza に、

I loafe and invite my Soul;

I lean and loafe at my ease, observing a spear of a summer grass.

2. L. A. Fielder, "Walt Whitman—Men and Ideas," *Encounter*, 16. (Jan. 1955).

3. Gay Wilson Allen: *Walt Whitman Handbook*, p. 3.

4. *Ibid.*, p. 4.

と loafer たる彼の面目を先づ画いている。そして彼の描写的イメヂを助けるかの如く、口絵には彼自身の仕事着姿の肖像画を入れた。(この肖像画は1876年版以降は挿絵として同詩——前述の如く *Walt Whitman* と改題された場合もある——の直前に入れられた。つば広の帽子をかぶつて、左手はズボンのポケットにつつこみ、右手は腰にあてている。開襟シャツの正面向いた立ち姿¹。) その st. 3 には「私は37才、完全な健康体で今から始める、/ 死に至るまで休まぬことを希いながら。」という句があるが、その前行に「私は両親から生まれ、両親は又その両親から、その両親は又その両親から、」とあるので、彼個人としての描写的なイメヂは直ちには形成されない。而もこの st.3 並に st.4 は本来 *Starting from Paumanok*, § 4 にあつたのを、1881年に *Song of Myself* へ移したものである。もと st.3 は “I am your voice” で始まり、st.4 は “I celebrate my elf to celebrate you.” で始まる。結局その「私」は「君」「彼」などとの平等相に於ける「私」である。即ち st.1 の

I celebrate myself, and sing myself,

And what I assume you shall assume,

For every atom belonging to me as good belongs to you.

を敷衍したに過ぎぬ。その為この両 stanza が割愛された訳であろう。今は前述の通り37才とか——これは移される前は36才とあつた。実際は1819年生れであるから36才の方が正しい。——死ぬ迄やめぬなどと己れ個人を指す句が出ている。その為に現在の *Song of Myself* は冒頗早くも平等相と特殊相の混乱がある。

併し §1 全体からみて「私の舌はこの大地、この大気から作られている、」「清濁併せ呑む、」「教義、宗派を無視する、」「本然のエネルギーによる無拘束の天性、」という表現から、彼の自然児たる風貌が浮ぶ。今このような漠然たる性格描写で始められた彼の自画像を追うて行こう。

流派に囚はれぬこの自然児はたゞ自然の教に従うとして、家の中であらうと

1. David McKay's edition of *Leaves of Grass with Autobiography*, 1900, p. 31.

外にいようと被りたい時には帽子を被ると主張する。

私はなぜ祈らねばならないのか、……儀式張らなければならぬのか。

(§ 20)²

大気は私の味覚に快適である。(§ 24)

窓扉を下した部屋や学校は私とは没交渉だ。(§ 47)

自由を愛するが為に学問に囚われないことを強調する余り、他の詩に於ても「学問は不用³」であるとさえ言う。「自由を愛する和蘭人よ、私自身君の血統の後裔⁴、」だという言葉も見える。

Song of Myself, § 39 第一行に「あの親しげな鷹揚な野人は誰か、他人と一緒に居ることを望む人」として己れを画き、

雪片の如く掟なき行動、草の如く素朴な言葉、櫛けづらぬ頭、笑ひ、純真、と自ら評する。その笑いは「泣きごとと言はぬ、」(§ 20)「私は悲歎すべき何ものもない、」(§ 44)で楽天的な野人の像が固まる。この野人の思いやりは表面のみにとどまらず深部へも滲み透るとして、「得意気な太陽よ、私は君の光に浴する必要はない、」(§ 40)と豪語する。

併し彼は己れの荒けづりの詩が理解困難であろうことをも懸念して、「私を理解しようと思へば高地か水辺に行け、/ 身近かの蚋は一つの解説だ、波のひと雫、そのひとゆらぎが鍵だ、」(§ 47)と suggest するが、更にわが詩の粗さを自認して、「私もまだ少しも馴されていない、翻訳不能だ、/ 野蛮な叫びを世界の屋根の上から響かせる、」(§ 52)と言う。而も「私の言う意味は分らぬかもしれぬ、/ だが君に健康を齎し、/ 君の血を浄めて力を与える、」(ibid.)との信念を以て「自己の歌」を結んでいる。

「自己の歌」以外でこの期の彼の外貌描写に役立つ歌がある。「一本の榲の木……、それは全く独りぼつちで立っていて、/ 枝から苔が垂れ下つていた、/ 一人の仲間もなく、黴ばしげな暗緑の葉を物言うように戦かせていた、/ そして

2. 以下単に Section の数のみを示したものは *Song of Myself* の Sec. を表わす。

3. *Myself and Mine*.

4. *Salut an Monde!* § 11.

その粗造りの物に屈せぬ、頑丈な姿は私自身を見る思いをさせた。⁵この榊の木のイメヂはそのまゝ彼の姿であろう。昔は彼の白髪を思わしめる。彼は若白髪で30才位で頭髪鬚髯共に際立つて白くなつていた「私の白髪を馳せ去る太陽に向つて打ち靡かす、」 (§ 52) といつているが、他の詩でも「鬚むしやで、陽にやけ、白髪を襟にたらし、不気味にやつて来た、⁶」「見給え、この浅黒い顔、灰色の眼を、/ この鬚を、襟に型れた刈込まれない白い羊毛のようなこの髪を、⁷」と画いている。

逞しい榊の木の思いは、「私はすべての人に私の様式を提供して来た、自信ある足取りで旅して来た。⁸」「何よりも先づ人間——その典型的なのは私自身だ。⁹」等の句と相応ずる強気を示す。而も歡びに戦く黒褐色の葉は、「何処にあつても私は常に自分を満足と勝利とで充していた。¹⁰」「これから先私は幸運を求めぬ、私自身が幸運なのだ、これからは不平も云わぬ。……強く、心満ちて私はこの大道を旅してゆく。¹¹」との楽天觀を表わす。このように第一期の自画像は先づ楽天的な野人、強健にして心満ちたる榊の木である。

(2) 宇宙・自然・大道 「自己の歌」の書き出しは「私は自己を頌え自己を歌う、/ 私がわがものとするものは君が君のものとするがよい、/ 私に属する凡ての原子は等しく君にも属するのだから。」と自他無差別の考えを先づ披歴しているが、その考えは § 20 の「凡ての人々の中に私自身を見る、人々は決して私以上でもなく又みぢんも私以下でもない、/ 私が自分について言うことは善悪ともに彼等について言うのだ。」に於ても繰返されている。この無差別觀はどうして生れているかを彼の言葉から考えて見たい。

両親がその両親から、その両親が又その両親からという考えは前にも述べたが § 44 には、一切の過去を身に享け完成した事象の極致として自己が生れたも

5. *I Saw in Louisiana a Live-Oak Growing.*

6. *Starting from Paumanok, § 15.*

7. *Behold This Swarthy Face.*

8. *So Long!*

9. *By Blue Ontario's Shore, § 14.*

10. *Song at Sunset.*

11. *Song of the Open Road, § 1.*

のを見て、「私のための準備は宏大無辺のものだ。」と言い、自己の素因としては、「自分が片麻岩や、石炭や、根のつながった苔や、果実、穀物、菜根と組合さつているのを発見する。/ 私の全身は四足獣や鳥類を以て塗りかためられている。」 (§ 31) と万物との繋がりを感じている。

同じく第一版から出ている *There Was a Child Went Forth* に、「何でも最初に目に触れるものがあると、彼はそのものになり切つて了つた。」と少年期の心境を歌っているが、このように何にでもなり切れる彼であるから、「私の近づくのに対して火成岩が昔の熱気を噴き出しても無駄だ…… / 物体は互に遠く離れて多種多様の形相を現わしても無駄だ…… / 鋭い嘴の海雀が北遠くラプラドルへと飛び去つても無駄だ、 / 私は素早くその跡を追い断崖の裂目にあるその巢へと登つてゆく。」 (§ 31) と言うのも当然である。*We Two, How Long We were Fool'd* の中でも、「私達は自然だ……私達は植物だ……岩石だ……雲だ、雨だ、地球の所産だ。」と歌っているが、植物や岩石をも自分と見るのであるから、人間はたとえ見知らぬ人々でも親しく感ずるのは彼にとつて極めて自然であつて、ここから次の詩句が生れる。

行きずりの見知らぬ人よ、君は私がどれ程慕わしげに君を見ているかを知るまい。……

君は私と一緒に成長し……共にあつた少年であり少女である。

私は君と共に食べ共に眠つた、君の肉体は君だけのものでなくなり又私の¹肉体は私だけのものになつたのだ。

こうして一切との関連が我が身のうちにあるのを感じて、「ホイットマンよ、御身の内部に拡がるものは何か、如何なる海か、²いかなる陸か、」「私のうちに³緯度は拡がり経度は伸びる、」と己れの大を自覚し、

O take my hand Walt Whitman !

Such gliding wonders ! such sights and sounds !

1. *To a Stranger.*

2. *Salut au Monde !* § 1.

3. *Ibid.*, § 2.

Such join'd unended links, each hook'd to the next,
Each answering all, each sharing the earth with all.⁴

と万象の涯なき連鎖即無尽縁起の世界観が形づくられている。それも現在の計りでなく、「過去のすべても世界の⁵一部、」であつて「過去、現在、未来の一切のかけ橋として宏大なる相似、⁶」の存在を悟る。

この相似の觀念から彼は、「一切のものの奥底に私にとつては私自身が、君にとつては君自身が認められる、⁷」のであつて、「一切は君と私、⁸」に或はもつと端的に「私」に要約出来る。この考えを更にはつきり打ち出したものが、「私は一切のものの觀念をもち、一切のものでありそして一切のものを信ずる。⁹」という断言である。一切は彼の一部であるとして、「父、母、男、女、市街、商品、奴隷、小船等目に触れるものは皆わが¹⁰一部、」という經驗的な考えよりも、より根が深い。同じ考えは、「君と君の魂は一切のものを包括する。¹¹」にも現われている。このように君と私とは等しいのであつて、「私が君と私自身を頌めることの素晴しさ、¹²」とも言うが、「間接のものは直接のものと等価値である、¹³」と見ている彼にとつては、君を歌い私を歌うも、「結局私は自分の名を繰返し呼んで¹⁴いる」こととなる。

以上は「私」の個体の発生を *physical* な面を主として見たのであるが、それを *mental* に見て、「私が母から生れ出る前に代々の人達が私を導いてくれた」 (§ 44) と言ひ、「私」の成立の多様性については「先在せるものと共に、¹⁵私の父たちと母たちとそして過去の時代の推積と共に。」とか、「私達は北歐古

-
4. *Ibid.*, § 1.
 5. *Unnamed Lands*.
 6. *On the Beach at Night Alone*.
 7. *By Blue Ontario's Shore*, § 16.
 8. *Ibid.*, § 17.
 9. *With Antecedent*, § 2.
 10. *There Was a Child. Went Forth*.
 11. *A Song for Occupations*, § 5.
 12. *Song at Sunset*.
 13. *Song of Prudence*.
 14. *What Am I After All*.
 15. *With Antecedents*, § 1.

代の吟誦詩人であり、予言者であり、修道僧であり、騎士である、私達はたやすく彼らと又更に多くのものを包含する。¹⁶」とか述べている。従つて彼が1860年日本使節親見豊前守一行の行列を見た感想で、日本人の背後にアジアを見、東洋来ると叫んでいる心がわかる。彼にはブロードウェイを練つてゆく行列の動きにつれて聖なる萬華鏡の如き変化が現れる。

ただ使節やその島国から来た陽にやけた日本人ばかりではない。

しなやかな寡黙の印度人が現われる、アジア大陸そのものが、過去が、死せるものどもが現われる。

.....

封ぜられた神祕……がこの観物の行列の中にある。¹⁷

このような一即多の考えを未来に向けると、「現われ来るべき一切のものを包有するものが私である。」 (§ 44) となり、更に「これは唯一個の人間ではない、 / 順番に人の父親となる人達の父親なのだ。」¹⁸ 「彼女もまた彼女自身だけのものではない、 / 彼女は多くの母親の母親なのだ。」¹⁹ 「未知のものも既知のものもすべてが一切のものの発生と力と胚種とを包含している。」²⁰ 等の句を説くに至る。

己れは一切であるとの観念から、己れの心眼をみひらけば一切は野放図な目録となつて現われ、²¹ 「天真の我れ、即自然」との句がそこから出る。彼の catalogue style²² はここから生れているのであつて、誕生から死に至る縦に見る人生の種々相 (§ 8) も業種別に横に見る人生の種々相 (§ 15) も、「それらは私である」 (§ 15) と観念せられるのである。そうした私の中の種々相には背

16. Ibid., § 2.

17. *A Broadway Pageant*, § 2.

18. *I Sing the Body Electric*, § 7.

19. Ibid., § 8.

20. *Germs*.

21. *Spontaneous Me*.

22. 彼自身は catalogue という語を殆ど用いない。詩文中には皆無で只 “The Rounded Catalogue Divine Complete” の title があるだけである。この詩も或る博士の説教に対する批判である。

反的の要素も多い。

私は老いたるものにも若きものにも属し、賢きものと同じく愚かなものにも属する、

.....

父性であると共に母性、成人であると共に小児、

.....

私は私自身の種々相に優る如何なるものにも反抗する。(§ 16)

と種々相を誇る。併し我が身の肉体がもつ矛盾混沌を認めては、

I too had been struck from the float forever held in solution,

I too had received identity by my body.²³

と不定な混沌の中から生れ、本性は肉体によつて与えられていることを認めているのである。更に「狼も蛇も豚も私の中に欠けてはいなかつた、」²⁴「私は淫らだ、自分も囚人だ、私の胸の中は汚れている。」²⁵と叫ぶ。

このような混沌矛盾の統一を我が姿に見出して、「私は一つの宇宙」(§ 24)であると断言し、私は宏大なるが故に矛盾あり(§ 51)と豪語している。彼が大道に呼びかけて、「お前は私が私自身を表現するよりもつとよく私を表現している。」²⁶と言うのも大道は種々相の統一を表徴しているのあてつて、「宇宙そのものが一つの大道である」²⁷ように、「私」なる小宇宙も大道であると見ているのである。

(3) 太陽・創始者 これはホイットマンの自己中心観を表わす。自己を宇宙とみて一切を包括するところから一步進み、一切は己れを通ずると見る。

私の為に輻合する宇宙の事象は不断に流転する、

凡てのものは私の為に書かれている。(§ 20)

人を貶すのは私を貶すのだ、

23. *Crossing Brooklyn Ferry*, § 5.

24. *Ibid.*, § 6.

25. *To Him That Was Crucified*.

26. *Song of the Open Road*, § 4.

27. *Ibid.*, § 13.

私を通じて靈感の波は寄せ示唆は流出する、 (§ 24)

かくて中心に立てられた彼自身は、すべてを光被する日輪にも劣らぬと感じて、

We also ascend dazzling and tremendous as the sun. (§ 25)

と、私達（私と私の魂の意）も凄じい眩光を発する太陽であると見る。太陽なる彼は矛盾する万象の中に毅然として立つ「一切の主人¹」である。彼は「他に依存せずあるがままに」 (§ 20) 存在し、「絶対に自分自身の主人として自らの欲する処に赴²」き、「自らの戒律のみを戒³」する。偉大なる法則は文句なしに受け容れられるが、私もそれと同じ型のものであるから自分の教えも享け容れられるであろう。私はいつかは虚空の中を天体の如く、ある意図のもとに快速な運動を展開し得ると確信する。⁴ すべての主人であり、すべてに屈せずという考えから、私の軌道は大工のコンパス位で自由にされるものでないとして、「私は不滅である、……/ 私の足がかりは花崗岩にかたくほぞ接ぎされている、」 (§ 20) と大工出身の知識をのぞかせている。己れの壮巖さを知る彼は更に、「私は内部も外部もともに神聖だ、そして何ものであれ私が触れ或は触れられるものを神聖にする。……/ この頭は教会よりも聖典よりも凡ての信条よりも以上のものだ、」 (§ 24) と歌うが、「私自身が絶えず前進する」 (§ 32) と見て、やがて「私自身が至高なるものの一人たる時がやつてくる」 (§ 41) と言い、更に進んで完成した事象の極致は私であるとし又前述の如く現われ来る一切のものを包有するのが私である (§ 44) という考えから、生命創始に係わると見て「私は既に一個の創造者である⁶」と歌う。

(4) 眞の自己・他の自己　　ホイットマンには I and my soul 或は之を一緒にした We という言葉が屢々繰返される。それは「自己の歌」の § 1, st. 2 に「私はさまよい歩きわが魂を招く、 / 夏草の穂を眺めながら思いのままに寄り

1. *Me Imperturbe.*
2. *Song of the Open Road, § 4.*
3. *We Two Boys together Clinging.*
4. *Who Learns My Lesson Complete?*
5. *Assurance.*
6. *Creator.*

かかり又はさまよう。」とある通り、彼のすべての詩の旅はこうして招かれ誘い出された魂との二人旅である。この道づれの判然たるイメヂは **I believe in you my soul**, で始まる §5 に現れている。彼が己れの魂のささやきを聞いた或る朝の思出である。

澄みわたつた夏の朝 私たちはねころんでいた、
君は私の腰にはすかいに君の頭を置いて私の身体の上で静かに向きを変え、
私の肋骨からシャツをおし開けて、むき出しになつた私の心臓に舌をさし入れた、

そして私の鬚に触れ、私の足をかい抱くまで君は私によりそつて来た。
こうして己の魂の声を聞いた時、忽然として身の辺りに平和と智慧の拡がるのを覚えた。それは地上凡ての技巧と論議を超えたものであつた。彼は「神の霊は私自身の兄弟であることを知り、 / そしてすべてこの世に生れ出て来た男は皆私の兄弟であり、女も皆私の姉妹であり、恋人であり、 / そして万有の内龍骨は愛であることを知り、 / 野に栄え或は萎む草の葉には限りがない……」と悟つた。万有の結びは、靈魂を共に頒けもつという自覚に基づく愛であると見る、即ち愛を万有の土台骨とする考えが生じている。

このような遊離した魂の描写は、他人の魂の場合にもある。例えば §11 に水泳している28人の若者とそれを河岸の邸の中で眺めている1人の女がある。女の魂は第29人目の泳ぎ手となつて若者の群に交つて行く。*To Think of Time*, §2 には魂と亡骸の関係を歌つて、「生者はその視力で亡骸を眺める、 / 然しここに視力をもたない別の生者がためらいながら、物珍らしげに亡骸を眺めている。」とある。これと同じ考えは次の如き詩句に現れている。

他の一つの自己即ち各人の複身は忍び隠れて蹠いて行く。¹

私の誇らかな詩篇の前に、未だ嘗つて手を触れられたことのない、語られ扱われたことのない真の自己の居ることを悟つた。²

1. *Song of the Open Road*, §13.

2. *As I Ebb'd with the Ocean of Life*, §2.

このように肉体と離れた私には、魂の眼即ち心眼が開かれているのであつて、「私の視覚は私の肉体の眼とは絶縁した、³」と言う。

靈魂そのものについての彼の考えを説くのは本稿の目的ではないので、ここでは深入りしない。ただ万有靈魂、靈魂不滅觀は随所に説かれている。

一切のものが例外なしに永遠の靈魂をもつ……

……

不滅の他に何もものもない……⁴

一切は靈的。⁵

靈魂それは永遠無窮。⁶

この靈魂を共に頽つところから、「この不思議な神こそ私であること、/ 他の神々である私の愛する男女の間にたち交ること、すべてが驚異である。⁷」「私が色々な言廻しで君に説くところは、ただ男も女も神と同様だということだ、…… / 君自身より神聖な神はない……⁸」等の言葉が生れている。こうした神觀は当然に「凡ての建築は君が眺めた時、君によつてそれら本来のものとなる。⁹」という内在論的な態度と結ばれている。

次に「自己の歌」に於ての我が魂は屢々自己の空想を表わす。殊にその §33 はこの天翔る靈魂即ち空想の眼に写る所謂 catalogue を繰り展げる。「私は山脈をめぐり、私の掌は大陸を覆う、/ 私は自分の空想と共に闊歩する。/ 都会の四角な家に住み——樵夫と共に丸太小屋で夜を明かす、」に始まつて、海に山に工場に台所に病院に農場に、ブロードウェイにユダヤの丘陵に、天界の果樹園にと飛び廻る。「私は物質的のものも非物質的のものも自由にとり入れる、/ いかなる守衛も私をとどめ、いかなる法則も私を防ぐことが出来ない。/ 私はただ暫くの間だけ錨をおろす、/ 私の使者は絶えず船で出かけてゆき彼らの

3. *A Song of Joys.*

4. *To Think of Time*, § 9.

5. *Starting from Paumanok*, § 13.

6. *Ibid.*, § 6.

7. *Song at Sunset.*

8. *Laws for Creations.*

9. *A Song for Occupations*, § 4.

報告を齎す。」この空想の魂は、時には侵入軍と共に野宿し、時には花聳を寢床から追い出してこれと入り代る。又英雄、殉教者、奴隸、消防手、老砲手などにもなりかわる。この節にはこの空想の対象たる物或は人物、例えば *I am the hounded slave. I am the mash'd firemen with breast-bone broken. I am an old artillerist.* 等の句があるが、その一々を小論に於て彼のイメヂとして取り上げない。ここに問題にしているのはこの様な飛び歩く自己の魂即ち自分自身を心の中で追うている作者の態度である。単なる空想による外界描写ではなく空想の中に活躍する自己の姿を見ていることが問題である。そしてこのような行動性の強い自己のイメヂは第二期以後は殆んど見られない。

(5) 案内者・教師 「私も一派の宗教を創める¹。」と歌うが、それは、「人々には如何に凡てが不滅であるかが判らぬが、私にはそれが分つている²。」という教師意識によつている。自分の説くところは明々白々の理であつて、決して鬼面人を驚かすような奇警な説を唱える訳ではない。「私が人を驚かすと思ふか。 / 真昼の日光は人を驚かすであろうか³。」と先づ断つている。平凡な普通人の一人として彼が与えるものは、お説教や僅かばかりの慈善行為ではないとして、

私⁴が与える時は私自身を与えるのだ。

私は説教や法律より私自身⁵を与える。

と彼自身を理解して貰おうとしている。そしてその信仰は平明の理ではあるが、「凡ゆる信仰のうちで最大であり最小である、 / 古代と現代の崇拜物を包含する…… / 五千年の後この世に再び現われるものである⁶」ことを信じている。

彼は人を導くといつても決して部屋や教室や図書館へ案内しない。「私は永

-
1. *Starting from Paumanok*, § 7.
 2. *Song of Myself*, § 7.
 3. *ibid.*, § 19.
 4. *Ibid.*, § 40.
 5. *Song of the Open Road*, § 15.
 6. *Song of Myself*, § 43.

遠の旅を旅するものだ / ……読者の男なり女なりの凡てを丘の上に連れてゆく、 / ……私の右の手で大陸の風光と大道とを指し示す。⁷」と言う。併し彼はいかなる人も、他人のためにその道を旅することが出来ない、自らでそれを旅しなければならないとし、私に対する質問には答えられぬ、答はあなた自身で見出せとすすめる。長い間、岸の板につかまつてびくびくしている人に、勇敢に海のただ中に飛び込んで波に向えと教える。

I am the teacher of athletes. (§ 47)

人生の難題に迷う人々を、海上でためらう船と見たてて、「水夫よ、一番よい水先案内を船に乗せ給え、今小舟にのせて送つてあげる。」⁸と歌うが、パイロットは自覚せる魂の意であり、魂の自覚を促がすのが指導者たるホイットマンの役目であると見ている。

(6) 民衆の友・僚友の詩人 「私は民衆の友である、伴侶である。」 (§ 7) と彼は言う。そして彼は人々が凡て彼自身と同じく不滅であり又神祕であると信じている。己れと等しなみに見る人々に対して彼は、自分は最も平凡で安直で、手近でそして与しやすいのだ、 (§ 14) として、彼を受け容れる人々に惜しげもなく彼自身を振り撒く。そして皆のもち得るものでなければ自分もとらぬとして、「私は原始的な合言葉を語り、デモクラシーの合図を贈る。」 (§ 24) と歌う。同じ考えは § 23 に私の言葉は近代人の言葉、大衆の一語 (the word *En-Masse*) というのがあるが、この stanza は 1867年の加筆である。

彼は大衆の友として、誰れかれの区別なく呼びかけて、

私は君が誰かを問わぬ、それは私には大切なことではない。 (§ 40)

と棉畑の労働者でも便所の掃除人でも、その右の頬に親しい接吻を与える。失望するものはこの頸にぶらさがれ、重病人に助けを齎すのは自分である。健康人にもなお必要な助力を贈ろう、と彼は万人の味方であることを力説する。こうして「過ぎ去るものも、止まるものも一人のこらず考慮」される。 (§ 43) わけて働き人がわが友であるとして、若い機械工が一番親しい、樵夫、農夫、漁師

7. Ibid., § 46.

8. *What Ship Puzzled at Sea.*

も仲好しだと言う。(§ 47)

このように誰れかれとなくわが親しき友と見て、こうした愛する人々と、彼らの凡ゆる悲哀と歡喜とを理解するものは只自分のみであり、これら僚友の詩人たるものは自分を措いて他に居ないと感ずる。

Who but I should be the poet of comrades?¹

これこそ己れの使命であると感じて、私は人の世のために、発明発見寄附行為等の方面では何一つ貢献することが出来なかつたが、ただ僚友のために大氣を通じて響く幾篇かの歌を遺すと言う。²

詩人としては自分をどのようなタイプと自認しているかを見よう。「自己の歌」に「一日一晩私と共にあれば詩歌の根本義がわかる、宇宙の真髓がわかる」(§ 2) と先づ詩は技巧でないこと、自然の理の把握であることを説き、そして他人や死者の眼を通して物を見ず、書籍の化物に養われてはならぬと提言している。

You shall no longer take things at second or third hand, nor look through the eyes of the dead, nor feed on the spectres in books. (§ 2)

こうした自然の歌い手であるから、格別工夫をこらすことなく、「時と同じく私の話には初めも終りもない。」(§ 3)(前述) のであつて、「私はただ君の舌の役目をする。」(§ 47) と凡ての人間の心を思うがままに歌う代弁者を以て任じている。

彼は己れの詩に凡ゆるものを取り入れる。外形より内容を重んずるので、詩に月並な定まり文句を入れない。一切の音響を歌に入れ (§ 26)、勝者のみならず敗者の為の行進曲を奏で (§ 18)、肉体を歌い靈魂を歌い (§ 21)、暗黒界も彼を通じて禁断の言葉が表現をもつ。

Copulation is no more rank to me than death is. (§ 24)

性交と雖も死と同様不潔ではない。併し性の問題は彼にあつては、屋内に於

1. *These I Singing in Spring.*
2. *No Labor-Saving Machine.*

ける情痴愛慾の場の所謂自然主義的な描写などはなく、永遠に流るる生命の不可欠の一過程として眺められているのであつて、それ故に死が生命の一位相であると同じ意味に於て讃えられるのである。

I swear I will never again mention love or death inside a house.

(§ 47)

屋内での恋や死については二度と口にしないと誓っている。そしてただ外気の中に留まるもののみに私自身を翻訳して見せようと言う。こうして彼は群集の中に朗々として而も断呼たる自己の叫びを聞く。

(7) 草 「自己の歌」の結びに近く彼はこう歌っている。

私は私の愛する草から再び生え出ると私自身を土に遺贈する、

若し君がまた私に会いたとなら君の靴底の下に私を探すがよい。(§ 52)

私を草とみているが、後に述べるように草は彼の詩集「草の葉」をも象徴しているので、私に会い私の話を聞きたいならば「草の葉」を手にとつて貰いたい。「草の葉」に触れることは即ち私に触れることである、という訳で彼の有名な句が生れている。

Camerado, this is no book,

Who touches this touches a man.¹

何故に私を草と看做すかについては、後に草のイメージを中心として論ずる予定であるのでここでは簡単に述べる。前にも自ら草の如く素朴な言葉と形容した通り、飾らぬ粗野な様子、どこにでも生え而も毎年春とともに芽生える。その普遍性と永遠性が民主主義詩人としての自己を象徴するのに相応しいと見ているのである。殊に大気のもとに歌う詩人である彼は、屢々草の小道をさまよひ、草の上に横臥して思索に耽り詩想を錬っている。名もなき一片の草も決して卑小なるものではなく、彼にとつては星辰の運行に劣らず完全であり而も奇蹟である。(§ 31) 「自己の歌」の冒頭に一本の夏草を眺めながら彷徨するとあるが、これは彼自身の姿と見ていることであろう。屢々現れる leaves of

1. So Long!

grass にひきかえ、a spear of grass と珍しくも単数になつてゐることも注意に値いする。

(8 漂流物・流星 彷徨者としての自画像は既に述べたのであるが、その「ひとつ所に停まらず、あてもなくさ迷う¹。」のは何の為であろうか。「おお私ほど慌しく出入りするものはない、/ 汐は何ものかを探し求めて倦むこともなく絶えず忙がしく流れている、私もそれと全く同じなのだ²。」「一切の物象が何のために存在するかも知らぬ、/ だが私はそれを求めて念入りに探すつもりだ³。」と何ものかを探してやまぬ彼も、「私は実に何ものも、只一つのことすら理解しなかつたことがわかつた⁴。」と謙虚な言葉を吐くこともある。流石の楽道家にも、「一抹の雲がかげり、何かわからぬ恐怖が私の心を暗くする⁵。」と時に心のかげりのあることを示し、「私もまた妙な思いがけない疑惑が私の中に湧くのを感じた⁶。」と次の如く歌う。

The dark threw its patches down upon me also,

The best I had done seem'd to me blank and suspicious.

My great thoughts as I supposed them, were they not in reality
meagre?

.....

I too knitted the old knot of contrariety⁷.

この第三行 meagre の後に Would not people laugh at me? という一句がこの詩が最初出た1856年にはあつた。それは1881年には削除せられたが、初版1855年の「自己の歌」に一点の疑念も表われて居ないのに思い比べる時、初版に対する世間の罵詈謗について自己反省があつたものと見られる。同じく自己反省は他にもある。自分は教える詩人の地位を引受けるのか、その地位

1. *Poets to Come.*

2. *Not Heat Flames up and Consumes.*

3. *To a Foil'd European Revolutionaire.*

4. *As I Ebb'd with the Ocean of Life, §2.*

5. *As the Time Draws Nigh.*

6. *Crossing Brooklyn Ferry, §5.*

7. *Ibid., §6.*

は尊くその条件は苛酷なものだ、自分は真に民衆の一人か、真にアメリカを知り尽しているかと自問する。そして

私もせいぜい波打際に打あげられた僅かの漂流物でしかない。⁹

と歌い、偶々流星を見ては、自分も束の間だけ生きる不思議な一人の人間と見て、

私自身も流星の一でなくてなんであろう。¹⁰

と歌う。心の安住を思つて「二度と放浪はせぬ。」とさえ言うても見る。¹¹

併しなお逞しい彼にはこれは一時的な影であつて、「常に生き、常に死んで、
/ ……歎きはしない、満足している。」¹²と生死の繰り返しが最善へ進むとの信念を失はない。その意味でどこことでも彼は楽天的である。

第 二 期

この期の主なる作品は *Drum-Taps; Memories of President Lincoln* の両詩群と *Passage to India; Song of the Exposition* 等である。 *Drum-Taps* は戦争詩である。奴隷制度反対は彼の年来の主張であつて、清澄の為に醸酵も必要であると見ているので当然戦争肯定の態度となる。戦争の初期(1861)の作 *Beat! Beat! Drums!* や *Eighteen Sixty-one* では勇ましく太鼓をたたき行進曲を奏する。併し弟の戦傷を機に無慙な戦場の情景を目撃してからは、警鐘乱打の手をやめて、「¹ 戦闘を駆りたてるより傷病者の世話」をする志願看護人となつた。敗戦、夥しい戦死傷者の群、その手当に狂奔する軍医や看護兵(彼もその一人)の有様が *A March in the Ranks Hard-Prest, and the Road Unknown* に描かれている。

こうした南北戦争参加の体験は、ロマンティストたるホイットマンに慥からずリアリスティックな傾向を生ぜしめるに至つた。看護人は冷静でなければなら

8. *By Blue Ontario's Shore*, §12.

9. *As I Ebb'd with the Ocean of Life*, §2.

10. *Years of Meteors* (1859—60).

11. *O Magnet-South*.

12. *O Living Always, Always Dying*.

1. *The Wound-Dresser*, §1.

ぬ。胸は焰と燃えていても「冷静な手で繃帯する」²必要があつた。

私は無感覚な沈着さで屍の山の中を動き廻り、時には斃れた兵士から離れて前線へと馳せつけるのであつた。³

手当するものの態度としては、腕き苦しむものと共に腕くことは許されぬ。対象と共に流れてはならぬ客観視の態度がここから生れる。戦前の詩では殆んど見られなかつた写実的な作品が、にわかにな現れ出した。例えば動中静の一こまというべき戦場風景描写の作品には *Cavalry Crossing a Ford, Bivouac on a Mountain Side, An Army Corps on the March* 等があり、平和な農園風景を描いたものには *A Farm Picture* がある。こうした対象客観視の態度に基づいて myself から one's-self のへの転換が生じたのである。

Leaves of Grass 決定版開巻第一頁「碑銘」の第一行は one's-self を頌めるとある。「自己の歌」の第一行は myself を頌めるといふのである。そしてこれが第一版の冒頭に掲げられたものである。この myself のイメヂは決して彼個人でないことは前述の通りで myself は yourself 或は himself でもよいのである。併し「君のものは私のもの」という表現は、この期に入つての「大衆」といふ言葉よりもより具体的である。myself は one's-self の代表として挙げられている。否 myself を通じて始めてそれに連がる他を考え、無尽の縁起に考え及んでいる。即ち最初から自己を離れて one's-self に思い到つていない。戦争体験から来る客観視の態度を埃つて始めて one's-self⁴ という言葉が用いられたのである。根本的には同一の思想であるこの両詩の間にこの作者の描写の態度に於ける変化が見られる。それは主観より客観への動きであり、対象について言えば具体より抽象への進みである。

(1) 斗いの詩人 私自身を中心に考えることが少くなつた為に、彼の描写的な自己のイメヂも直接的のものは数少ない。詩を歌う自身を説明して戦争

2. Ibid., § 3.

3. *Old War-Dreams*.

4. この語の用いられた詩は *Quicksand Years* (1865); *Small the Theme of my Chant* (1867); *One's-Self I Sing* (1871) 等である。

中のものとしては「無気力な押韻詩を私に求めるなかれ……私は戦争が生れたのと同じものから生れた。」⁵戦後のものとしては「西部で謳う新しい詩聖」⁶等がある。戦のはげしさも平和克復後の西部膨脹の逞しさも、我が詩のなかに盛りあげんと、旺んなる意気を示している壮年期の彼を偲ぶことが出来る。

併しこの期のうちにも幾分の懷疑はある。永久に繰り返される斗争や周囲の浅ましき群衆を思い、それらと自己の連がりを考えては、「私ほど信なき者が何処に居るであろう、」と自問し、「生命は存続し、力強い芝居が演じつづけられるのだ。」⁷と自答している。

次に自己の比喩的なイメヂを見る。

(2) 靈魂・愛・神 自己の描写的イメヂも乏しいこの期に於ては、それに応ずる如く比喩的イメヂも数少い。

私は愛である。⁸

偉大な神こそ私だ。⁹

私こそ普遍的な靈魂。¹⁰

の三者が見られるだけであつて、而もこの三者は彼に於ては究極に於て一如である。このイメヂは私と私の魂として第一期にも現れている。尤もそこでは直接に普遍的な魂のイメヂとしては挙げられていないが、idea としては繰り返し述べられているものである。これは self の抽象化であつて、言い換えれば my soul から soul 一般への発展である。「印度への航路」に用いられている soul は22例で、その中 my を冠するもの僅かに2例であることは注意を要する。

この期で彼の心を捉えている最大のテーマは死生の問題である。戦争による夥しい死の場面に直面した彼としては当然であり、彷徨する魂も現実の死に暫し飛翔の羽をひそめている感じである。併し根本的な靈魂についての考えは少しも揺がず、イメヂとしては反つて concrete に私は靈魂、愛、神と言い切つている。

5. *To a Certain Civilian.*

6. *Proud Music of the Storm*, §5.

7. *O Me! O Life!*

8. 9. 10. *Chanting the Square Deific.*

この期の終り1871年の作に「博覧会の歌」がある。第四十回博覧会を記念して、科学の発達による近代産業の躍進と祖国アメリカの繁栄振りを謳歌している。そして欧洲的宮廷ロマンスの時代は過ぎたと新大陸へ詩神を招かんとしている。新しき詩題の豊かさを讃えて得意の羅列はある。が併しそれは客観的説明的のものであつて第一期の如く *catalogue* に続き、或はその中に踊る自己の行動のイメヂが伴っていない。これは空想の翼の衰えを示している。同じ年の作「コロンブスの祈り」に、壮年時代冥想的であつたコロンブスが、今は老いて貧しく半身不随、頭脳もぼやけていると次の如く歌っているが、それはそのままに数年後の彼自身にあてはまる。

Thou knowest my manhood's solemn and visionary meditations,

.....

Old, poor, and paralyzed.....

.....

My hands, my limbs grow nerveless,

My brain feels rack'd, bewilder'd.

これは McKay 1900 版によれば1871年の作であつて、偶然の暗合であるか、或は詩人は予言者であるということが立証される訳でもあるが Centenary Edition では76年であり、Modern Library 版に依ると74年であるので、これ等に依るとこのコロンブスはホイットマン自身のイメヂとなる。¹¹

同じく1871年に *Sparkles from the Wheel* があり、旺盛なる想像力を以て流動し続けていた自分の姿を淋しく振り返っている。そしてその翌72年には逞しい空想力を wild trumpeter に見たてて、私に刺戟を与え希望を再生せしめよと歌っている。

Thy song expands my numb'd imbonded spirit, thou freest,

launchest me.¹²

Sing to my soul, renew its languishing faith and hope,

11. G. W. Allen: *Walt Whitman Handbook* の Chronological Table. 1874 年の部に In "Prayer of Columbus" the poet identified himself with the "battered, wrecked old man" と記してある。

12. *The Mystic Trumpeter*, § 3.

Rouse up my slow belief, give me some vision of the future,
Give me for once its prophecy and joy.¹³

第 三 期

(1) 下り坂の旅人・一斑點 1873年、ホイットマンが54才の一月に中風症を発し職を退いて第一次の遺書を作つた。この年母をも失つた。其後病状は一進一退、時に講演旅行に出かけられる程回復したこともあるが、貧と病とによる窮迫の生活に入ることとなつた。詩作は歿年まで続けられるがも早想像の翼にのつて飛ぶわが姿を想うことは出来ない。

この期の最初の発表は *Song of the Redwood Tree* (1874) であるが、死に瀕する杉の巨木の叫びである。それはカリフォルニア地方の発展を謳歌するもので、西部の発展、新しい時代、新しい社会の到来を祝福しているのが、一面世代の転変を痛感する病後の哀感がただよつている。

Farewell my brethren,
Farewell O earth and sky, farewell neighboring waters,
My time has ended, my term has come. (§ 1)

開拓者の斧に倒れて、さらば兄弟よ私の時は終つたという巨木の声は、そのままホイットマンの心境を伝えたものであろう。

心身の衰えを感じては下り坂の中年期にある旅人と己れを見て、

A traveler of thoughts and years, of peace and war,
Of youth long sped and middle age declining.¹

ともろもろの想い、平和と戦争、過ぎ去つた青年の日を思っている。壮んな日には宇宙の宏大にも譬えた彼自身の逞しい魂も、とみに意気衰えて自己を茫漠たる世界のただ一斑點と見て謙虚に歌う。

My self a speck, a point on the world's floating vast.²

13. Ibid., § 8.

1. *Out fom Behind This Mask.*

2. *To the Man-of-War-Bird.*

(2) **夕陽** 1880年代に入つてからの詩に表われた彼自身のイメヂは、詩の長旅をまさに終らんとする姿である。年来の主張の如く死生一如と欣然として死を享け容れんとする態度である。若き日に種子を蒔き、その芽生え成長を楽しんできた草の葉が、繁り栄えて次第に人々の心の中に新しき根を張り或は種子をおろし始めている。畢生の仕事の結実を祈念し予想する明るい態度が見られる。「私自身の夕暮に備え——私の長く曳く影に備え、/ 私の星きらめく夜に備える為に、³」と自己の夕暮に備え太陽よ光を与えよと希うが、やがて「太陽はいま沈んだ、私もまた姿を消すであろう。⁴」と身を夕陽に譬えている。このような落日のわが身のイメヂには更に次の如きものがある。

(3) **落葉木・感謝を捧げる兵士、旅人** 詩想の衰えを冬近き日の梢にまばらにかかる木の葉と見、私自身を野原か果樹園の、すつかり葉を落した立木に譬えている。

You lingering sparse leaves of me on winter-nearing boughs,
and I some well-shorn tree of field or orchard-row;⁵

69才の六月にはまた一時病が篤かつた。それでその年を送る歌 *A Carol Closing Sixty-nine* に

The body wreck'd, old, poor and paralyzed—the strange inertia
falling pall-like round me,

と、肉体が老い衰え半身不随となり異常な無気力が棺布のように降りかかると病状を訴えているが、直ちに語を継いで、

The burning fires down in my sluggish blood not yet extinct,
The undiminish'd faith—the groups of loving friends.

と不活潑な血液の底にまだ衰えぬ火、魂の結び合いによる愛の信仰の火が燃えさかっていると歌う。

70才になると前年の重態からやや回復したが、歩行が出来なくなっている。

3. *Thou Orb Aloft Full-Dazzling.*

4. *Twilight*

5. *You Lingerin Sparse Leaves of Me.*

長い詩の旅を振り返つて、自己の心身の成長に直接又は間接にかかわりのあつた過去の一切に感謝を捧げる。それは戦い終へて立ち戻つた一兵士、或は長旅終えた旅人の喜びの感謝である。

As soldiers from an ended war return'd—As traveler out
myriads, to the long procession retrospective

Thanks—joyful thanks!—a soldier's, traveler's thanks.⁶

この心静かに暮す態度は、病んで老い衰えてはいるが、ここに坐つて物書きおれば、年来の不平も苦痛もなく、不快な気鬱や倦怠も日毎の歌に濾されてゆく⁷、という歌にも表われている。併しこの安らかな心境のうちにも、病める身の未来に対する些かの懸念はひそんでいて、「近づき来る不可思議なるもの、御身の朦朧として定かならぬ影——御身の齎すは生か、死か、⁸」この上の痲痺症か、それとも静かな大空と太陽か、手早く片付けるのか、それともこの生気のないまま放つて置くのかとわが70才に訊ねている。

(4) 死近き我 72才の作である「わが空想よ、さらば」詩群の序に、近年中風に罹つて老いぼけ、刈込まれた羊か、貝類のように手足も出ない状態になつているが、これは明かに南北戦争当時、余りに熱心に傷病兵の看護に当つた結果であると自ら記している。Fancy の消え去つたわが身を確認しているこの詩群の中には、病の小康を得た晩年の小春日和を楽しむ感懐も随所に表われているが、大体は死近き意識が溢れている。この中に *L. of G.'s Purport* という「草の葉」の意図を詠んだものがある。成熟した青年期から始めて追求の手をゆるめず、さすらいと凝視をつづけて、戦争、平和、昼と夜、一切を取り入れ、暫しの間もわが仕事を棄てることなく、今ここに病んで貧しく老齡のうち仕事を終える、と自伝の抄を与え、その詩の終りに、

To-day shadowy Death dogs my steps, my seated shape, and has
for years—

6. *Thanks in Old Age.*

7. *As I Sit Writing Here.*

8. *Queries to My Seventieth Year.*

Draws sometimes close to me, as face to face

と幻のような死が足跡をつけ、坐る姿を追っている、永年そうやつていたのだ、時には顔向き合せるように傍近く寄つて来る、と歌う。死を凝視する趣は詩群 **Old Age Echoes** に属する *Death's Valley* にも現れている。これは依頼によつて **George Inness** の油絵 “*The Valley of the Shadow of Death*” に題すとして歌つたものであるがその中に次の句がある。

おお死よ、私自身も永い間御身の間近かで、
御身の静かな想いの中で、呼吸を続けて来た。

以上自己のイメヂを三期に分けて解説したのであるが、各期を通じ特に著しい特徴と思われる点を重ねて一二附言したい。それは既述の如く第一期に於ては想像の中の私に行動を伴う描写的イメヂが甚だ多いことである。「自己の歌」特にその § 31 並に § 33 に於ける如く、万物との関連を説くためにはその対象を自ら追いかけて廻したり、或はその事件の場に居あわせたりする。(第一期第4項参照)。この行動性は「自己の歌」以外にも少くない。

私は寢床から寢床へと訪ねる、私は順々に他の眠る人々の傍近く眠る。
私は他の夢みる人々の凡ての夢をわが夢の中に見る
そして私は他の夢みる人達になりきるのだ。

The Sleepers.

若し君が店で仕事をして居るならば私も同じ店で君のそば近くで仕事をす
る。

.....

若し君が食卓で大いに飲むならば私はその食卓の向い側で大いに飲む。

A Song for Occupations, § 1.

私は幼な子と共に母の胸に抱かれ

泳ぐ者と共に泳ぎ、相撲とるものと相撲をとり、消防隊と共に駆ける。

I Sing the Body Electric, § 2.

これらは第一版から現れているものであるが、其他この期に属するものには次の如き句がある。

私は本のページのなかから現れて君の両腕のなかへ飛び込む——死が私を
喚び出すのだ。

So Long!

南方ではフロリダの海辺に冬をおくる夥しい海鷗と共に翼もゆるやかに飛
び交い啼き叫ぶ、

.....

私は春の水と一緒に笑いさざめき小躍りし乍ら流れてゆく、

Our Old Feuillage.

私は貝搔きと鋤と鰻突きの魚扱をもつてゆく、
汐は退いたか。私は干潟で蛤掘りの仲間に加わる。

A Song of Joys.

私は世界の諸都市を見て、随意に自分をそれらの一部とする、
私は生粋の巴里つ子だ。

.....

私は凡ての都会に降りたつ、そして再びそれらの都会から起ち上る。

Salut au Monde, §9.

汝、風よ、私は君と一緒に吹きまわつたと思う、
汝、水よ、私は君と一緒に凡ゆる岸辺を撫でまわつた、

.....

日の光や熱の透る都市は凡て私が自から浸透する、
鳥の通う凡ての鳥々へ私自から翔つてゆく。

Ibid., §13.

このように種々相を写すにも彼自体が動き廻っている。只一つ自分の立場
を動かさず四囲を見廻わして種々相を描いたものには、河を渡りつつ眺めた
Crossing Brooklyn Ferry, §3 があるのみである。

第二期に於ては上のような行動性が影をひそめたわけではないが、非常に例
が少なくなっている。例えば *A March in the Ranks Hard-Prest, and the Road
Unknown* の中で、戦斗の思出を偲び乍ら、傷病兵の姿を想い、臭気を感じ、

だが先づ私は死にかかつている少年を覗く、彼は眼を開き力なく微笑を私に向ける。

やがてその眼は閉じる、静かに閉じる、そして私は闇の中へと急ぎ出かける。

と歌う。又 *From Paumanok Starting I Fly like a Bird* に於ては万有の想いを歌うために天駆けると言い、

北極の歌をうたうために北の空に飛び、

カナダを身の中に摂り入れるためにカナダに到る。

と歌うが、観念的であつて自己のイメヂの飛翔は見られない。*The Last Invocation* に於て、いまわの時に音もなく私を迂り出させよとあるが、それは堅固な肉体の城砦から脱出する魂を考えているのである。即ち *my soul* と *Soul* の合体を描いているのであつてそれは死の問題である。又 *When Lilac Last in the Dooryard Bloom'd*, §14. では、私たち三人の道づれ — 死の *thought* と *knowledge* と私——を小鳥が享け容れてくれたのだという句があつて、私のイメヂを捉えられそうであるが、これも死が中心の問題であるために私個人は影が薄いのである。

このように第二期の自己のイメヂに於ける行動性は第一期に比し著しく減少している。死の事実の客観視による写実的な態度の発生により、空想的な行動性が失われたのである。同じく「私は神である」とのイメヂも第一期では個人の靈性を尊重する余り「私は神に劣らぬ」の意を表わしている。そこでは内在的な神観が有勢である。併し第二期では「私は神である」とは、神(超越神として)の如しというのである。この神観の稚移が行動性に掣肘を加えていると考えられる。

第三期に於ては、老人としての回想的な要素のみが多く現れていて、青壮年期に於ける如きロマンテイクな自己の姿の動きは全く見られない。要するに自己のイメヂの変遷の要因は、第一期から第二期への移りに於ては戦争の体験による精神的なものであり、第二期から第三期への移りに於ては重病による肉体的なものであると見る事が出来る。

既に述べたように、ホイットマンは自ら、「この書物に触れるものは人間に触れるのだ。」と歌い、「草の葉」即自己たることを言明している。G. W. Allen (op. cit.) も「ホイットマンは、己れの詩集との一体化に全力を傾注した、」と評する。若しその努力が成功しているとすれば、彼自身のイメヂの追求は、ただ「草の葉」全体のイメヂ、把握の鍵を授けるばかりでなく、「草の葉」のイメヂ、そのものを捉えたこととなるであろう。併し自己のイメヂが「草の葉」のイメヂに於ての一部（たとえ主要なものであつても）であるか、或はそのイメヂ全体と同等又は平行のものであるかは、自己以外の主要なイメヂを検討した後でなければ、にわかには断ずる訳にはいかない。これについて Arthur E. Briggs がその著 *Walt Whitman, Thinker and Artist*, (p. 21) に於て *How much of Whitman's book was himself? Only his ideal self was intentionally inscribed there.* と評している言葉は聴くべきものであると思う。

(本研究は昭和29年度文部省科学研究助成補助金による研究成果の一部である。)